

[論文紹介] 松本歯学 14 : 364~371, 1988

key words : 周 大成 — 中国口腔医学史略 — 和訳

周 大成博士の中国口腔医学史略の和訳

市川博保

東京都

Japanese Translation of the “A Short History of Chinese Dentistry”
Written by Dr. Zhou Dacheng

HIROYASU ICHIKAWA

Tokyo

Summary

Dr. Zhou Dacheng is Professor of Stomatology at Beijing Capital Medical College and known as an authority of Chinese dental history. In 1980, he came to Japan and gave a special lecture entitled “Progress of dentistry in China—a short history” at the congress cosponsored by three Societies of Japan Medical, Dental and Pharmacological History at Tokyo. Recently, I received his article, “A short history of Chinese dentistry,” contributed to the *Chinese Stomatological Journal* in 1985. Here I review this article, which organized very well a long period of Chinese dental history. It takes up chiefly dental writings in chronological order from the Yin dynasty to the present age, and contains the following.

Medical organization in the Sui and Tang dynasty.

Pulp devitalization and tooth restoration by medicaments in the Han, mottled enamel in the Wei.

Operation of cleft lip in the Qin and Jin.

Amalgam filling, reduction of luxation of temporomandibular joint, smoke therapy for toothache, and a wall painting on oral hygiene at Dunhuang in the Tang.

Toothbrush made of fur in the Liao.

Tooth replantation, prevention of caries by tea drinking, cautery hemostasis in the Song.

Prevention of periodontal disease by salt in the Ming.

Prosthetic restoration in the Qing.

Chinese medicine unites with Western medicine in the present age.

はじめに

北京市、首都医学院口腔医学系教授周大成博士は1980年10月東京で開催された医学、歯学、薬学の3史学会合同総会において「中国口腔医学発展簡史」と題する特別講演を行った中国における歯科医学史の第一人者である。最近、「中国口腔医学史略」と題する論文を博士から贈られたが、長い中国の歯科医学の歴史が極めて要領よくまとめられていると考えられるので、和訳して紹介するものである。

周大成博士について

周大成博士は1935年東京歯科医学専門学校の専修科（口腔外科学教室）を修了され、1980年、前述の学会には鈴木勝日本歯科医学史学会会長の招待により来日されたもので、当時は北京市口腔医院予防科主任の要職にあつて、口腔衛生学、歯科医学史などの研究に従事されていた。1982年、北京市に首都医学院が設立されると口腔医学系教授となり、口腔医学史を担当されている。現在までに日本歯科医学史学会誌に寄稿された博士の日本語による論文を表1に示す。また博士が関与された中国の歯科医学書で、1980年以降に訳者が贈与を受けたものに、口腔粘膜病（1983年）児童牙科臨床診療（片寄氏の著書を翻訳1985年）簡易歯科用語集（日本の歯科用語集に中国語を加えたもの1987年）がある。

今回、和訳した「中国口腔医学史略」は1985年6月に創刊された口腔医学縦横誌第1巻第1期（号）に掲載された論文の別刷で、4ページの本文と文献で構成され、図版はない（図1）。

和訳にあたって人名、固有名詞などに使われている中国の簡体字（略字）は出来る限り日本で使われている漢字に直した。（注）は訳者の注である。

“中国口腔医学史略”の訳文

中国伝統医学の中で口腔医学はう蝕、歯周病、口腔粘膜病、口腔外傷および化膿性口腔疾患の研究と治療を主な内容とする科学である。長い歴史の中で、口腔医学は口歯科、耳目口歯科、口歯咽喉科、中華民国時代には牙科と多くの呼称があった。口腔科の名称は解放後1950年代から段々と使われるようになった。

殷代には疾歯、う歯、疾口、疾舌、疾言などの口腔疾患に関する甲骨文字が見られた。漢代の始めに淳于意はわが国で最も早いう蝕の症例を記載していた。漢代末の張仲景の著作の中に「口歯論」一卷があったが、惜しいことには失われて仕舞った。隋、唐時代の医療機構には太医署があって、五つの専門科から成り、耳目口歯科はその中の一科であった。医学博士が主として教え、助教がこれを補佐していた。宋代にも太医署があったがあとで太医局に改まり、九科を置いた。その中に口歯兼咽喉の一科があった。元代になって医学は十三科に分かれ、口歯科の名称は引続いて用いられた。清代の太医局は十一科に分かれ、口歯科あるいは口歯咽喉科はその一科であった^{1,2)}。

わが国歴代の口腔医学の著作は数十種類あったが、その大部分は遺失してしまい、現存する唯一の口腔医学書は明代の薛己の「口歯類要」である。近代になって西洋の口腔医学が伝わって、わが国の口腔医学は以前に比べて大いに発展し、口腔医学の中に多くの新しい分科が出現した³⁾。

漢代の墓から出土した「五十二病方」の中に口腔疾患の治療について書かれたものとして、「齒脉」とその経路の循環過程があり、そのほかに楡皮、美桂その他の薬物を合せて歯に充填する方法について述べている。これはわが国で最も古い歯の充填術である⁴⁾。

とくに注意すべきことは、張仲景（およそ150～229年）の著作「金匱要略」に書かれている“雄黄、葶苈を粉末にして臘日に採取した豚の脂

表1：周大成博士の最近の日本語による論文

中国口腔医学発展簡史（講演抄録）	
日本医学雑誌	26巻 3号 昭和55年7月
日本歯科医学史学会誌	8巻 1号 昭和55年9月
江西省南昌市東呉高栄墓より発見した金製小楊枝について	
——1980年《考古》3期219頁の“江西南昌高栄墓的発掘”に依る——	
日本歯科医学史学会誌	8巻 2号 白和56年1月
明代の歯科専門書《口歯類要》について	
日本歯科医学史学会誌	8巻 2号 昭和56年1月
中国口腔医学発展簡史	
日本歯科医学史学会誌	8巻 3号 昭和56年3月
中国新石器時代人類の口腔に球を含む習俗について	
日本歯科医学史学会誌	8巻 3号 昭和56年3月
江陵鳳凰山168号墓の西漢古屍の口腔疾患及び其他	
日本歯科医学史学会誌	8巻 4号 昭和56年9月

の中に溶かして4~5個を槐の枝の先端につけて貼薬して焼灼する”(注：雄黄は硫化砒素，臘日は大晦日)という歯髓失活法で，アメリカのスプナー(Spooner1836年)に比べて1500年も早い。現在でも世界中の多くの国でこの薬剤による歯髓失活法をそのまま使っている。これはわが国の口腔医学上の重要な貢献の一つである^{5,6)}。

三国時代魏国の嵇康(223年~262年)には「養生論」という著作があって，その中で“頭にいる風は黒くなり，柏を食べる麝は香り，険しい所におれば頭が癭になり，晋で生活すれば歯が黄色になる”(注：晋は山西省)これは山西省の飲料水にはフッ素の量が多いので慢性のフッ素中毒が歯の表面に現われることを示している。以前は斑状歯(Mottled enamel)と云っていたが，その理由はたゞ歯の表面に斑があったからで，まだフッ素が含まれていることは知られていなかった。したがって現在は歯牙フッ素症(Dental Fluorosis)と云われている。わが国でのこの疾患の認識はアメリカのイーガー(Eager 1901年)に比べて1600年も早く，これもわが国の口腔医学史上の重要な発見である^{7,8)}。

わが国では遠い秦代から唇裂修復手術を行うことが出来たが，文字による記載は晋代になってからである。それに関して，流動食をとり，談笑を禁ずる注意事項が書かれている(「晋書」および「榘庵小乘」)⁹⁾。

「晋書」にはまた抜歯による致死例の記載がある。それによると“嶠(温嶠)は歯疾で抜歯したところ，中風になって死亡したが，その年令は42才であった”という。その頃すでに抜歯は全身的に重要な関連があることが判っていた¹⁰⁾。

隋代の「諸病源候論」に抜歯損候の項があってその中で“抜歯によって脉を損傷すれば，血が止まりにくく，臓腑が空虚になり，目まいがして悶える”と説いた。したがって抜歯後出血について一層深く認識されるようになった。

医事制度に関しては，唐代の太医署は事実上世界で最も早い医学校であった。医学の四つの系の中に五科があり，その中に耳目口歯(五官)が一科をなし，この科の学生の数は総数の約10%で，修業年限は4年である。各部門の中では博士が学生に教授し，その他に助教，医師および医工が教えることを補佐していた。(注：表2を参照)

唐代の蘇敬が著わした「新修本草」(659年)の中に水銀合金で歯の窩洞を充填することについて“白錫と銀箔および水銀を一緒に煉り合はずと銀のように硬くなるが，これで歯の欠けたところを補う”と書かれている。英国人ベル(Bell)が最初に水銀合金を使ったのは1862年で，今日まで150年の歴史であるが，わが国では1300年前にすでに歯の充填に銀膏を使用していた。このことはわが国の口腔医学における世界的に重要な発明の一つである。^{11,12)}。

孫思邈著「千金要方」の中で顎関節脱臼を治療するには“一人が手指で患者の頤部を引張りながらゆっくり押すともとの位置に入る。押す時には素早く指をはずさないと誤って指を噛まれることがある”と記載されている。また「千金翼方」には一歩進んだ方法として，術者の手指を竹の管の中に入れて咬傷を防ぐように提案している¹²⁾。

唐代以降はずっと，歯を燻蒸する方法で歯痛の治療が行われていた。「千金要方」は“黒い羚羊の脂と萸若子の等量を合せ，まづ赤く焼いた鋤釜の中に入れると煙が出るので，布で頭を覆い煙を口

表2：唐代の医学教育制度(中医学解難⁹⁾より転載)

唐太医署的医学教育(編制341人)	公共基礎課：《黄帝内經素問》，《神農本草經》，《針灸甲乙經》，《脉經》	教職員：医博士1人，助教1人，醫師20人，医工100人，典藥2人	医科 164人	医 生 40人	治療(内科)：学制七年
					瘡科(外科)：学制五年
	針科 52人	少小(儿科)：学制五年	耳目口歯(五官科)：学制四年		
		角法(理療)：学制三年	教職員：針博士1人，助教1人，針師10人，針工20人		
按摩科 36人	針生20人：學習《黄帝針經》，《明堂》，《脉訣》，《流注図》，《側僂図》，《赤烏經》，《神針經》	教職員：按摩博士1人，按摩師4人，按摩生16人	按摩生15人：學習導引之法，按摩，正骨之術。		
咒禁科 21人	教職員：咒禁博士1人，咒禁師2人，咒禁生8人	咒禁生10人，學習咒禁術。			

に入れて歯を燻蒸する”と云い、王燾の「外台秘要」には“苺子三合と青錢七文を用いるが、まず青錢を焼いて赤くし、口にくわえることが出来るような口の小さな瓶を選び、焼いた青錢を瓶に入れ、苺子を一つまみ入れると炸裂音がするので少量の水を錢の上かけると蒸気が出る。それによって歯を燻蒸する。錢が冷えたら止め、三合の薬が無くなるまで繰り返す”とある。「東医宝鑑」(注：朝鮮の)および「医心方」(注：日本の)でも歯を燻蒸する方法を採り上げているが、使用器具は同じではない。清代の太医院では歯を燻蒸する銀製の器械を製造して使用していた。薬を罐の中に入れて、銀の管を罐の上部に連結し、痛む歯に接触させ、薬を含んだ蒸気で燻蒸する。これは極めて巧妙な方法で、口腔医療器械の一步前進したものである。現在この薰牙器は故宮(注：北京故宮太医院)の薬局に保存されている¹³⁾。

孟詵著の「食療本草」には“砂糖を多く摂ると、筋肉を弱め、歯を損う”と指摘している。このような砂糖を摂ると歯を損うという説は、現在のう蝕の原因からみても、実際の情況によく符合する。

筆者はかつて唐代末期の敦煌の壁画「労度叉闍聖図」に、剃髪し、顔を剃り、手指で歯を擦っている「揩齒図」を発見した。これは和尚達が頭を剃った後、地上に据り、左手に含嗽の瓶を持ち、右手中指で前歯を擦っているもので、わが国唯一の口腔衛生に関する絵画で大変価値のあるものである^{14,15)}。

遼代の口腔医学について、我々が知っていることは余り多くないが、いくつかの事柄を参考として提示することが出来る。

例えば、むかし歯を清潔にするために手指や楊子が多く用いられたが、ときには楊柳の枝を咬んで軟かくし、薬をまぶして歯を磨くの用に用いた。しかし遼代に入って初めて歯ブラシが現われた^{15,16)}。

1956年、筆者は北京の故宮博物院の保和殿で文物を参観したとき、出展品の中に「2本の歯ブラシの柄」があった。出展品の説明によると、これはかつての熱河省の大營子村にあった国王の婿、衛国王の墓から出土したものであった。その形は現在の歯ブラシに似ており、大変年代が経っているので、歯ブラシに植えた毛束は腐朽してなくなっているが、植毛した跡を見ることが出来る。

歯ブラシの柄は完全に残っており、色は薄い黄色で、植毛部は二列に並び、ともに八個の孔があり、孔は上下が通じていて、毛束は等間隔になっている。柄は円く、植毛部は扁平、長方形である。製法は現在の標準歯ブラシに大変よく似ている。筆者はこの二本の古い植毛歯ブラシは当時の一般人が常用したものではないと思った。それはこの歯ブラシが出土した墓は、遼代の国王の婿、衛国王が葬られていたからである。同時に大量の金銀製品と百種類以上の重要な文物が出土している。この墓は1953年に発見され、1954年には墓誌が出土し、これによって遼の応歴9年(959年)の穆宗時代の墓であることも判り、今を去る1,000年ほど前のものである。筆者(1956年)は「中華口腔科雑誌」に“植毛歯ブラシは中国の発明である”という一文を発表して、わが国の歯ブラシは宋代の発明であるとしたが、今回わが国では遼代で既に非常に合理的な歯ブラシが製造されていたという1,000年も前の実物が証明されたので、現在ではこの説を翻さなければならなくなった。外国の歯ブラシは17世紀に出現しているが、わが国に遅れること700年以上である。植毛歯ブラシの発明はわが国の口腔医学方面での偉大な貢献である^{16,17)}。

1976年に内モンゴル寧城県一肯中郷で遼代の墓を一基発見し、出土した墓誌とその他の文物は完全に整理された。墓の主人は鄧中挙で、墓誌にはその祖父鄧延正の事蹟が記載されており、それによると“祖父鄧延正は多くの技術に通じ、とりわけ医学に優れていた。皇帝の開廟式に際して、皇太后が突然歯の疾患にかかり、長い間治療したが効果が無かったので、延正を招いたところ、その技術でたちまち治癒させた。その後待医となったが、医緩や華佗のような能力があり、場所や富貴、貧賤、老若を問わずに、患者を治療し、いろいろの役職を重ねた後、節度使に任ぜられ、職務に精励したことによって功勞者の中に加えられ、上將軍の位を賜った”ということである。したがってこの誌文から遼の聖宗の時であったのを知ることが出来る。鄧延正は皇太后の歯疾を治療する医師として重要な地位にあったが、至難の業を見事に成し遂げていた。とくに立派なことは、貧しく孤独な患者に対しても心を込めて世話をした。惜しいことに残された資料が少ないのでさらにこれ以上研究を進めることが出来ない。しかしこの墓誌

と文物はわが国の口腔医学史の上で大変珍しい貴重な資料である¹⁹⁾。

宋代の口腔医学は唐代の医学的基礎の上に立って、さらに発展した。「聖恵方」の“歯が脱落しないように銅末散で固まるようにする治療”および「聖濟総録」の“脱落した歯を整復して固定する”は、ともにわが国では10世紀に歯牙再植術が行われていたことを示すもので、外国で最も早い歯牙再植術はフランスのフォーシャール (Fauchard, 1723年) が応用を開始したが、わが国に比べておよそ700年あとのことである²⁾。

義歯についての文献は、現在までの研究では宋代のものが最も早い。陸游 (1127年～1209年) の「歳晩幽興」という詩に“塚をうらない、棺をつくることは、私の愉快なことではない。髪を染め、義歯を入れるのは愚かな人だ”という句があり、その自註に“最近無くなった歯を補うことを仕事とする医者があると聞いた”と記載している。陸游から約10年後に楼鑰 (1137年～1213年) が書いた「玫瑰集」に“義歯作り人である陳安上に贈る文”があって“陳氏の技術は非常に優れており、歯に病気のある人も手易く一新させる。手をつけたならば、貝殻で編んだような白い歯を保つ義歯をつくるのが出来る”とあることから宋代では義歯による修復がすでに普通に見うけられていた。ヨーロッパでは18世紀にヒトの歯、カバの歯、象牙、ウシの骨などを亜麻あるいは絹の糸で天然歯に結紮して補綴歯とした。義歯による修復の方面では、わが国は外国に比べて700年早い宋代ですでに高いレベルになっていた²⁰⁾。

宋代では歯ブラシの使用はごく普通に行われていた。宝元時代 (1038年～1040年) に温革が撰んだ「瑣碎録」の中で“朝起きたときに歯を磨いてはならない、歯根が露出して歯が動揺し、歯痛を患う。これは歯ブラシが馬の尻尾で作られていて歯を損うからである”と説いている。陳自明の「婦人大全良方」(1237年)の産後養護法の項に“舌を擦ってはいけない、心気になるおそれがあるから、歯を磨いてはいけない、血逆になるおそれがあるから”とある。1322年日本から留学していた道元禪師は中国の僧侶が牛の角の柄と馬の尻尾で作られた歯ブラシで歯を磨くのを見て、これは不潔なものであると考え、古代の楊柳の枝で歯をこする方法が良いと主張した。したがって上述の歯磨に

は反対意見があることから、当時の歯磨の方法は正しくなかったと同時に、その頃歯を磨くことが、日常普通に行われていたことが判る^{17,18)}。

蘇東坡 (1037年～1101年) による「東坡集巻70」の中に茶を飲むことがう蝕の予防になると書かれている。彼は“私には良い方法があって、いつも大切にしている。すなわち濃い茶で口をすすぐと気分が良くなり、胃腸に刺激を与えず、歯間に肉がはさまったとき、茶で浸すようにすすぐと縮んで抜け出し、ほじり出すわずらわしさが無い。歯をすすぐことに慣れると、歯が次第に堅固になり、う蝕は自然におさまる。一般には中等あるいは下等の茶を使う。上等のものは数日間に一回位飲んでも害にならない。このような理屈を人々は余り知らないので、詳しく述べた。元豊6年8月23日 (1083年)”と説いた。現代の口腔医学の発展により茶を飲めばう蝕予防になる理由は、茶に含まれるフッ素の量によるものであると実証された。900年も前に茶を飲むことがう蝕予防になることを指摘していたのは、口腔衛生方面の重要な貢献である²¹⁾。

敵用和 (1253年) が「済生方」で口腔腫瘍 (内疳瘡) を切除する方法を記述しているが、それには“鉤形のメスで腫瘍の根本を切断し、焼ゴテを7, 8分に赤く熱してあて、止血する”という方法が主張されている。このような焼ゴテによる止血法は唐代ですでに広く用いられていた。

元代の飲膳大医である忽思慧 (1330年) の「飲膳正要」の中で、寝る前に歯を磨くことと、塩を用いて歯を磨くことを主張して“朝歯を磨くより夜磨いた方がよい。そうすれば歯疾は起らない”と云い、また“朝塩で歯を磨くと平常歯疾にならない”と説いている。わが国では南北朝の梁の時代から、塩で歯をこすると口腔疾患の予防になることが知られていた。とくに塩による歯周病の予防と治療する方法は価値があると提唱された。日本では目下多数の人々が塩の入った練歯磨を使用しており、われわれも現在塩入り歯磨の製造をしている。これは中国と西洋の医学が結合して歯周病の治療をする有効な措置である^{14,21)}。

明代の歯ブラシは馬の尻尾で作られたものだけでなく、棕櫚製の歯ブラシもあった。高濂が著わした「遵生八箋」(1498年)に“歯を磨くのに棕櫚製の歯ブラシを使ってはならない。歯が衰えるか

らである”と説いている。清代の曹庭棟の著述「老々恒言」(1699年)に「駿馬の歯ブラシを使ってはならない、歯肉を傷つけるので、これは歯のあたりである”と説明している。彼等が棕櫚あるいは馬の尻尾で作った歯ブラシで歯を磨くと歯肉組織を痛めると指摘しているのは正しい観察である¹⁸⁾。

楊繼洲は「針灸大成」(1601年)で、金津、玉液というツボに針を刺すとき「三稜針を湯で煮なければならぬ」と述べているが、消毒して感染の継発を防ぐのがその目的であり、これは重視すべき進歩である。

清代の顧世澄による「瘍医大全」(1688年)では、唇裂の手術をするとき、麻酔薬を塗布した後、メスで切開し、刺繍用の針で縫合し、肉が着いてから抜糸することを提示している。1688年、琉球国の魏士哲は38歳のとき、わが国の福州に渡り、名医黄金發について中国式の唇裂修復術を学んだ。帰国後、琉球国王の孫、尚益その他6名の患者に対し、麻沸湯の麻酔下に唇裂修復術を行った。手術の結果は非常に良く、瘢痕を残すこともなく全快した。当時の唇裂修復術をみても、相当高い水準に達していたことが判る。

乾隆時代の梁玉繩著「白土集」第27巻で「現在、町の中に義歯を作る店があり、その看板に『入れ歯は天然の如し』と書いてあって、それは宋代からあった」と述べられ、併せて「七修類稿」には種歯(注：歯を植えること)の説明があり「それは現在の歯牙補綴とは同じではない」と云い、歯牙補綴と歯牙再植術をすでに区別していた。このわが国の歯牙補綴術についての説明は、その水準が可成り進んでいたことを示している²⁰⁾。

18世紀になって、西洋医学技術がわが国に伝来したのにつれて、わが国の口腔医学は大きく発展した。解放後、その発展はとくに迅速である。現在の口腔医学は口腔内科学(その中に歯体病、歯周病および口腔粘膜病などの学科を含む)口腔外科学(歯槽骨、顎顔面、腫瘍および整形などの学科を含む)口腔補綴科学(総義歯、局部義歯、冠橋などの学科を含む)口腔矯正科学、口腔児科学、口腔予防保健科学など多方面にわたる専門学科がある。医学院(注：医科大学)の中に口腔医学系(注：歯学部)が設置され、多くの歯科専門の人材を育てた。またその中に専門家も出ている。中

国と西洋の医学を一体化する方針の政策で、針灸や漢方薬による治療も口腔疾患に応用されて比較的良い結果が得られている。

“中国口腔医学史略”の引用文献

- 1) 周大成(宗岐)(1956) 殷墟甲古文中所見口腔疾患考, 中華口腔科雑誌, 4:155—158.
- 2) 司馬遷(1947) 史記・扁鵲倉公列伝, 第45, 成都書局乾隆12年.
- 3) 周大成(1981) 明代の歯科専門書口歯類要について, 日本歯科医史学会誌, 3:39—40.
- 4) 馬玉堆漢墓帛書整理小組(1979) 五十二病方, 文物出版社.
- 5) 鄭麟蕃(1957) 口歯疾患, 5, 人民衛生出版社.
- 6) 周大成(1955) 我国首先応用砒剤治療牙齦の歴史, 中医雑誌, 2:56.
- 7) 嵇康(1956) 嵇康集・養生論, 卷3, 文学古籍刊行社.
- 8) 周大成(1959) (注:誤植か)弗化物防齦近況, 中華口腔科雑誌, 13:173.
- 9) 周大成(1959) “兔唇”一名の由来, 中華口腔科雑誌, 7:173.
- 10) 晋書・列伝37縮印百衲本, 商務印書館, 上海.
- 11) 朱希涛(1955) 我国首先応用汞合金充填牙齦的光栄史, 中華口腔科雑誌, 3:1—2.
- 12) 周大成(宗岐)(1956), 祖国医学対下顎関節脱位の記載, 中華口腔科雑誌, 4:1—2.
- 13) 周大成(1980) 我国薰牙考, 中華口腔科雑誌, 15:87.
- 14) 周大成(宗岐)(1957) 揩歯考, 医学史と保健組織, 3:129—13(注:脱落)
- 15) 周大成(宗岐)(1954) 口腔衛生小史, 中華口腔科雑誌, 2:156—158.
- 16) 周大成(宗岐)(1956) 遼代植毛牙刷考, 中華口腔科雑誌, 4:159—160.
- 17) 周大成(1956) 植毛牙刷是中国発明的, 中華口腔科雑誌, 4:5.
- 18) 周大成(1964) 中国是最早使用和発明牙刷的国家, 健康報, 3月14日.
- 19) 項春松,(1982) 内蒙古寧城遼郡中冪墓, 考古, 3:281.
- 20) 周大成(1983) 祖国医学在口腔科方面的四项重要發明, 中西医結合雑誌, 3:59—60.

- 21) 周大成 (1981) 中国口腔医学発展簡史. 日本
歯科医史学会誌, 8: 1-17.
- 22) 周大成 (1984) 茶叶在防齲上的应用. 茶叶,
1: 40-42.

考 察

周博士が1980年に、開催された第8回日本歯科医史学会総会（医歯薬3史学会合同）で行った特別講演「中国口腔医学発展簡史」の内容を日本歯科医史学会誌に発表されるままでは、中国の歯科医学の歴史はほとんど知られていかなかったと云ってもよい。歯科医学史書でさえ、中国医学史書の中に書かれている口歯科の歴史を採り上げているに過ぎないものが大部分である。欧米の歯科医学史書¹⁻⁴⁾に共通している点は、中国における最古の医書といわれる黄帝内経に書かれている医学思想と治療法を紹介し、その中にある歯痛の種類とその治療法を挙げ、ついで歯科疾患に対する漢方薬と鍼灸の応用を古典的な歯科の治療法として記述し、口腔衛生の面から見ると、工芸品として作られた楊枝があるとしている。なかにはアマルガム充填について触れているものもある。これに対して日本の歯科医学史書⁵⁻⁷⁾では、古代の中国医学を紹介しているだけで、歯科医学の歴史については全く触れていない。同じ漢字使用圏にありながら、欧米のものに比べて内容が極めて少ないのは不思議なことである。いずれにしても通史を記載しているものはない。

周博士は黄帝内経には余り重きを置いてはおられないようであり、また Curt Proskauer が中国における植毛歯ブラシの発明は1498年であると記述しているのを Weinberger が紹介しているのに対して、中国の植毛歯ブラシは10世紀であると述べている。

ま と め

今回、和訳して紹介したこの論文は、周大成博士が自著「中国口腔医学発展簡史」を補足した上で要約されたもので、殷代から現代に至るまでの中国歯科医学の簡明な通史である。この論文から中国には古くから多くの歯科治術が存在していたことが知られる。とくに周博士のもう一つの専門分野である口腔衛生学、予防歯科学に関する記述に重点がおかれているように見受けられた。

（今回の和訳に当って使用した辞典類を文献欄⁹⁻¹²⁾に挙げる。）

稿を終るにあたり、論文の和訳を快諾され、訳文のご校閲を賜った周大成博士と和訳にあたって多くのご教示を頂いた周虹氏に深く謝意を表し、また終始有益なご助言を賜った松本歯科大学衛生学院院长、橋口緯徳教授に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) Guerini, V. (1909) A History of Dentistry. 34-41.
- 2) Sudhoff, K. (1921) Geschichte der Zahnheilkunde. 36-41
- 3) Weinberger, B. W. (1948) An Introduction to the History of the Dentistry. Vol. I. 40-46. C. V. Mosby Co. St. Louis.
- 4) Hoffmann Axthelm, W. 本間邦則訳 (1985) 歯科の歴史, 43-48. クインテッセンス出版, 東京.
- 5) 川上爲次郎 (1931) 歯科医学史. 35-38. 金原商店, 東京.
- 6) 本間邦則 (1971) 歯学史概説, 1-3, 7. 医歯薬出版, 東京.
- 7) 正木正 (1975) 新編歯科医学概論, 49-50. 医歯薬出版, 東京.
- 8) 天津中医学院編 (1986) 中医学解難. 51-53. 天津科学技術出版社, 天津.
- 9) 北京語言学院 (1986) 簡明中日辞典. 東方書店, 東京.
- 10) 中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編 (1987) 現代漢語詞典. 商務印書館, 北京.
- 11) 第二軍医大学科技情報室編 (1984) 漢英常用医学詞匯. 上海科学技術出版社, 上海.
- 12) 漢英医学大詞典編纂委員会編, 漢英医学大詞典 (1987) 人民衛生出版社, 北京.